



きらっと彦根

彦根の魅力★再発見



春の彦根城全景

人類の歴史に HIKONE の名を刻もう

彦根市職員の鈴木達也です。私は現在、市から県へ派遣され、彦根城世界遺産登録のための仕事をしています。地域のイベントなどに出かけると、景観フォーラムの会員の皆様をはじめ、多くの方々から激励のお言葉をいただき、大変勇気づけられています。心より御礼申し上げます。

当初は2024年の登録を目標にしていたのですが、佐渡金山の推薦書を日本から再度提出することになった影響で、少なくとも1年は遅れることになりました。それでも私たち担当者がやるべきことは変わりません。次のチャンスに向けて、着実に推薦書をブラッシュアップしていきたいと考えています。

ところで、世界遺産登録の意義とは何でしょうか。彦根城と景観の保全を確実にすること、まちづくりの明確な旗印ができること、市民の誇りになること、観光客の増加による経済効果、地域の持続可能な発展への貢献など、いろいろなことが考えられますが、私が考える最大の意義はこれです。

「人類の歴史の1ページにHIKONEの名を刻むことができる。」

現在、1,157件の世界遺産がありますが、その1つ1つを見ることで、人類がこれまで歩んできた長い歴史や、それぞれの国や地域で育まれてきた多様な文化を知ることができます。たとえば、推薦書の作成作業の中で、彦根城と外国の城郭や宮殿を比べてみたのですが、それぞれの政治や社会の仕組み、宗教、建築様式、気候・風土の違いを反映して、多様であることが分かります。

1つ1つの世界遺産がいわば「人類の歴史の1ページ」になっていて、私たちは、そのページをめくることが、世界中にあるかけがえのない遺産を知ることができます。世界遺産の価値を知ることは、お互いの文化を尊重する気持ちにつながるでしょう。そこに優劣はありません。世界遺産とは、世界中の人々がお互いの歴史や文化の価値を知り、尊重し合うことで、平和の砦を築くためのものなのです。

彦根城を世界遺産に登録することは、私たちがその一員に加わるということです。彦根城の素晴らしさを世界中の人々と共有する。同時に、それぞれの文化の素晴らしさをお互いに認め合う。このことは、とても素敵なことではないでしょうか。

私たちが主張している彦根城の価値は、「江戸時代の安定した社会を築いた政治の仕組みの物証」ということです。単に建物が立派だから登録しようということなら、そのものだけの価値で終わってしまいますが、彦根城の価値は、地域とのつながりがあってはじめて意味があります。だからこそ、彦根城と歴史を共有してきた地域の遺産を守り伝え、美しく豊かな景観を育んでいく活動が大事なのです。これからもいっしょにがんばりましょう！

(滋賀県文化財保護課 彦根城世界遺産登録推進室

鈴木達也)



足軽組屋敷が残る

芹橋らしいまち並みデザインガイドをつくる②

去る2月26日(日)に、第2回研究会「まちな並みづくりの目標とする柱を考える」が行われました。

芹橋らしいまち並みを考えるうえで、気になっているところ、いいなあとと思っているところをグループごとに出し合い、意見交換をしました。

危険なブロック塀や通行の障害になっている電柱の問題、空家・空き地の管理の問題など、普段の暮らしの中で気になっている意見が多く出ました。

一方で、芹川の自然が身近にあり、ケヤキ並木やお城が見える土手からの景観がいいね という意見や、足軽

屋敷や江戸時代の町割りを大切に空家も活用していこう という意見も出ました。

これらの意見をもとに、住まう人も気持ちよく、訪れる人にも魅力のあるまちになるよう「まち並みづくりの柱」を考えていきます。

次回4月23日(日)第3回の研究会では、建築家の松井郁夫さんを講師にお迎えし、「まち並みづくりのアイデアや実現する仕組みづくり」について学びます。外からの視点での新鮮なお話に期待したいと思います。

(笠原啓史)



第2回研究会 ワークショップ
「まち並みづくりの目標とする柱を考える」



芹川土手から眺める芹橋のまち並み
遠くに彦根城天守を望む

さとの宿だより

トイレの謎

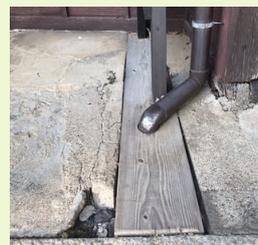
一圓屋敷には、大正時代に書かれた平面図が残っています。私たちが宿を始める前に行った改修工事のように、そのときどきの持ち主が、自分たちの住みよいうように間取りを変えていることがわかります。

その平面図によると、トイレは3カ所ありますが、屋敷を寄贈して頂いた当時は、2カ所しか見つかりませんでした。家族が使っていたと思われる奥のトイレと、井伊直弼さんの巡見時に使用になられたような畳を敷いたトイレと、3つめは場所自体が無くなっていました。

毎月、野菜市&集いというイベントをしていた10年ほど前、一圓屋敷の建物の説明を濱崎一志先生(専門は建築史)がされました。2階への階段途中にある小部屋に通じる小さな引き戸のこと、明治24年の合掌くずしのため2階の天井の角が丸くなっていることなどは、いつもどおりの説明でした。

けれどもこの日は、「この部屋の向こうに柴置場と便所がある」と話されました。そして、「見てみましょうか」ということになり、濱崎先生は筆筒をどけて、押し入れを開け、布団が積まれている2段の板を外し、壁と思われる仕切りを突き破られました。「そんなことしていいの〜?」と心配したのも束の間、向こう側に明るい一本の廊下が現れました。そして突きあたりにはトイレが。

そのときに初めて、2階の一番右側の窓が、この廊下の窓だったことに気が付きました。いつも野菜市のとき踏んでいた板は、小便の排水溝だったのでした。(江竜美子)



多賀さとの宿 一圓屋敷

<https://www.ichienyashiki.jp/>

〒522-0317 滋賀県犬上郡多賀町一円149

Tel. 050-3319-1050 info@ichienyashiki.jp